

アーティストが考える「都市」とは？

都市のヴィジョン

— Obayashi Foundation Research Program

Press Release | 2021.3.2

《都市のヴィジョン— Obayashi Foundation Research Program》

第3回助成対象者は、exonemo（エキソニモ）に決定



Photo : Niko

公益財団法人大林財団は、助成事業《都市のヴィジョン— Obayashi Foundation Research Program》の第3回助成対象者を、ニューヨークを拠点に活動するアートユニット・exonemo（エキソニモ）に決定いたしました。

会田誠氏（第1回）、シアスター・ゲイツ氏（第2回）に続き、exonemoの両氏には、2021年度を当助成事業の活動期間として調査・研究に取り組んでいただくことになっております。内容の詳細については、決定次第あらためてお知らせいたします。

《都市のヴィジョン— Obayashi Foundation Research Program》について

アーティストが「都市」をテーマに研究・考察する活動を支援する目的で、2年ごとに実施される大林財団による制作助成事業です。2017年度にスタートし、今回で3回目を迎えました。

この助成事業は、豊かで自由な発想を持ち、さらに都市のあり方に強い興味を持つ国内外のアーティストを対象としており、5人の選考委員の推薦に基づいて決定されます。助成対象者には、従来の都市計画とは異なる独自の視点から、都市におけるさまざまな問題の研究・考察をし、住んでみたい都市や、新しい、あるいは理想の都市のあり方を提案・提言していただきます。

<https://www.obayashifoundation.org/urbanvision/>

推薦選考委員

選考委員長

住友文彦 アーツ前橋 館長／東京藝術大学大学院 国際芸術創造研究科 准教授

選考副委員長

飯田志保子 キュレーター

選考委員

野村しのぶ 東京オペラシティ アートギャラリー シニア・キュレーター

保坂健二郎 滋賀県立近代美術館 ディレクター（館長）

藪前知子 東京都現代美術館 学芸員

委員長コメント

2020年は芸術の歴史において、どのような転換点になるのでしょうか。最初の緊急事態宣言が出されて以降、社会生活における「必要なもの」と「不要なもの」が区別されていくなかで、芸術支援のあり方も問われています。様々な文化事業が延期や中止を余儀なくされましたが、2020年3月のWHOによる「パンデミック宣言」直前に第2回助成対象者のシアスター・ゲイツのレクチャーパフォーマンスが無事行われ、そのあと迅速に第3回助成対象者の選考の会議が重ねられました。「必要」「不要」のどちらかに性急に区別されるのではなく、生きるうえで大切なものとして芸術の役割を再確認するためにも、この助成活動を持続させることができたのは本当によかったと考えています。

今回の選考には当然ながら昨今の経済、性差、人種の不平等をめぐる議論が大きく反映され、この助成活動が向かうべき方向性をあらためて話し合う機会になりました。その結果、インターネット黎明期から男女二人のユニットで先鋭的な活動をおこなってきたexonemo（エキソニモ）を選出しました。コロナ禍で私たちの生活がデジタル技術に依存する割合は高まりましたが、例えばインターネットによって産業分野の新しい可能性を探索するだけでなく、物質的な技術と人間の欲望が相互に及ぼす影響など、デジタル技術の内外を行き来する批評的な視点を二人が表現してきたことは、これからますます重要な視座になるとして高く評価されました。2015年以降ニューヨークに移り住み、そうした諸問題についてさらに考察を深める機会を得たexonemoは、これからの都市における芸術の役割を提示するうえでも相応しいアーティストであると考えました。

選考においてはアジアや他の地域のアーティストの候補も検討しましたが、海外との往来がどうなるか不透明であり、助成対象者が調査や制作の過程を関係者や一般に広く共有する機会をなるべく確保するためにも、今回は日本国籍を持つアーティストを選出することにしました。

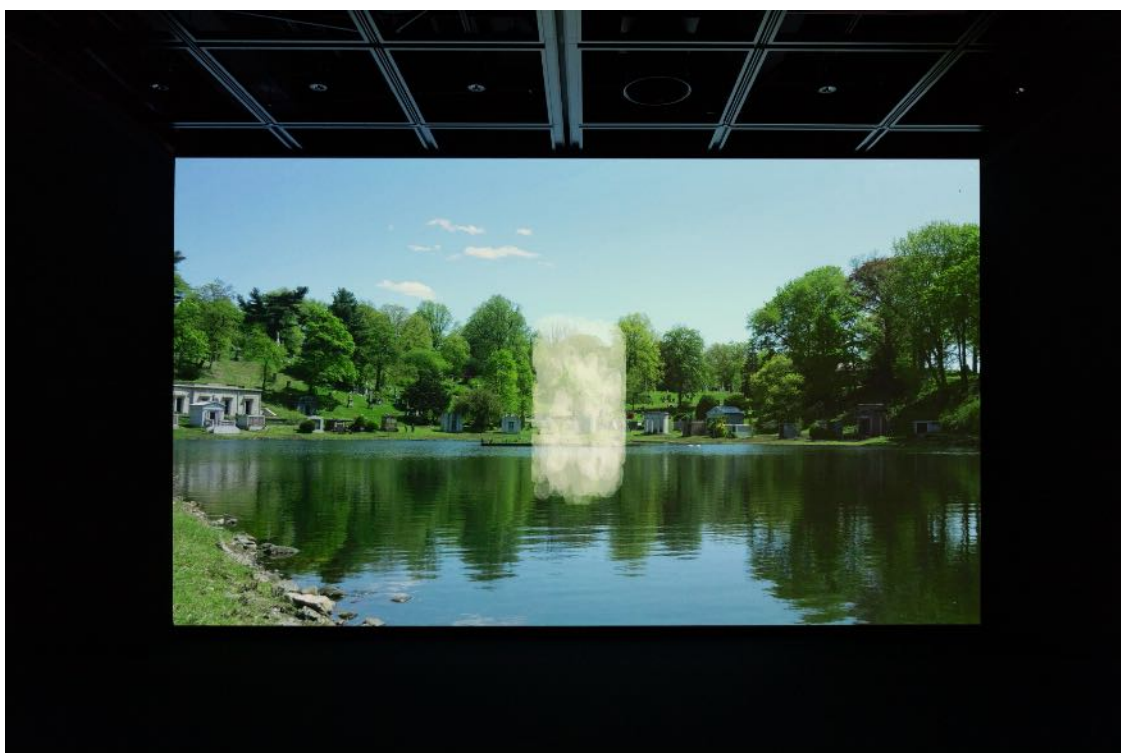
この大きな転換期に、私たちが一緒に踏み出すべき歩みを示唆してくれるような活動になることを期待しています。

住友文彦

第3回 助成対象者について

exonemo (エキソニモ)

怒りと笑いとテキストエディタを駆使し、さまざまなメディアにハッキングの感覚で挑むアートユニット。千房けん輔と赤岩やえにより、1996年よりインターネット上で活動開始。2000年より活動をインスタレーション、ライブ・パフォーマンス、イベント・プロデュース、コミュニティ・オーガナイズなどへと拡張し、デジタルとアナログ、ネットワーク世界と実世界を柔軟に横断しながら、テクノロジーとユーザーの関係性を露にし、ユーモアのある切り口と新しい視点を携えた実験的なプロジェクトを数多く手がける。2006年《The Road Movie》がアルス・エレクトロニカ ネット・ヴィジョン部門でゴールデン・ニカ賞を受賞。2012年よりIDPWを組織し「インターネットヤミ市」などを手がける。2015年よりニューヨークに拠点を移す。



「Realm」

Commissioned by HeK (Haus der elektronischen Künste Basel) Net Works Series.

「エキソニモ UN-DEAD-LINK アン・デッド・リンク」展より
提供：東京都写真美術館
Photo：丸尾隆一



エキソニモ

千房けん輔（左）と赤岩やえ（右）

Photo：Niko

| 《都市のヴィジョン— Obayashi Foundation Research Program》 について

この財団は、1998年9月に、「財団法人 大林都市研究振興財団」として設立されました。その名前が示すとおり、都市に暮らす人々に豊かな生活をもたらすような都市づくりを実現するために研究活動に従事されている方々への支援を通じてわが国の都市研究の発展を後押ししようと微力ながら努力してきました。2010年9月に内閣府から公益財団法人として認定していただき、2011年9月に現在の「公益財団法人 大林財団」の名称に変更しましたが、同じ基本理念を貫いて来しました。

日本は、戦後復興を経て高度経済成長を達成し、物質面ではかなり豊かになり、都市環境も効率的で利便性の高いものとなりました。しかし、豊かになったと言われる日本の都市も、そこで日常生活を営む人々の心も本当に豊かになったかと言えば、答えに窮するところです。戦後しばらく日本は戦争で焼きつくされた国土を復興させるのに必死でしたし、他に類を見ないほど自然災害の多い国であることを考えれば、まずは国民の生命を守る頑強なインフラの構築が長い間国の使命であったことは頷けます。

また一方で、世界を見ると、貧困にあえぐ地域が多数存在し、その人たちにとってはその地域のどのような施設も生きてゆくための手段でしかありません。さらに、これは世界中で言えることですが、都市への過剰な人口集中、自動車の普及や産業の集積などによる大気汚染、自然環境の喪失、温暖化ガスによる異常気象の発生などの諸問題が生じました。近年日本では、少子高齢化に伴い人口が減少する中で空き家の放置や孤独死といった社会問題も起きています。

そこで、人々に豊かな生活をもたらすような都市づくりというものを再考し、人との交わりという部分で都市を研究することに何らかの貢献ができないか。都市があり、人がいて、そこでの様々な関わり、例えば芸術、経済、環境、歴史など都市と人間に関係する幅広い分野での研究を支援しようと考えたわけです。

この助成事業では、都市工学や都市の専門家ではなく、豊かで自由な発想を持ち、さらに都市のあり方に強い興味を持つ国内外のアーティストにお願いし、都市における様々な問題を考察し、住んでみたい都市や新しい、あるいは、理想の都市のあり方を研究してもらうこととしました。

考えてみれば、都市というテーマを研究したり考察したりするアーティストを支援している組織というのはこれまでなかったと思います。それに応えるのが、この《都市のヴィジョン— Obayashi Foundation Research Program》という助成事業です。

公益財団法人 大林財団 理事長
大林剛郎

| 過去の採択者について



Courtesy Mizuma Art Gallery

第1回（2017年度）

会田誠

〔展覧会〕

「GROUND NO PLAN」

特設サイト（アーカイブ）：

https://www.obayashifoundation.org/urbanvision/event/2017_aidamakoto/



Photo: Rankin

第2回（2019年度）

Theaster Gates（シアスター・ゲイツ）

〔リサーチプロジェクト〕

「To Be A Maker: Finding Afro-Mingei

作り手になること—アフロ民藝を求めて」

（制作継続中）

| お問い合わせ

〔助成事業についてのお問い合わせ〕

公益財団法人 大林財団

〒104-0045 東京都中央区築地1-12-22コンワビル13F

TEL：03-3546-7581／FAX：03-3546-7582

E-mail：obf-zaidan@obayashi.co.jp

〔取材・広報用画像についてのお問い合わせ〕

TM PRESS（担当：望月章宏）

TEL：090-2445-3808

E-mail：mochizk@gmail.com